

児童の学びを広げ・深める授業デザインの構築 ～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して～

伊仙町立犬田布小学校 教諭 別府 佳代

— 目 次 —

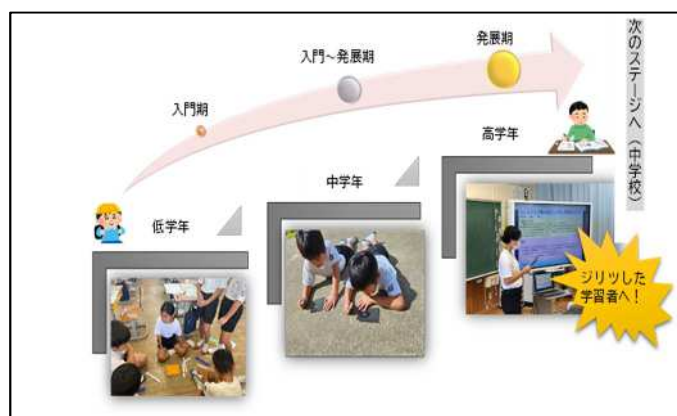
はじめに	1
I 研究主題	1
II 研究主題設定の理由	1
III 研究の構想	2
1 研究の仮説	2
2 研究内容	2
3 研究構想図	3
IV 研究の実際	3
1 研究を支える4つの視点	3
2 研究内容1「学びの見通しをもち、学びの方法を選択・決定するための工夫」	5
3 研究内容2「互いの考えを広げ・深める協働的な学びの工夫」	6
4 研究内容3「自分の学びを実感し、次の学びにつなぐ工夫」	7
V 研究のまとめ	8
1 検査・調査結果から見られる児童の変容	8
2 研究の成果と課題	9
おわりに	9

【参考文献】

- 奄美教育論文・実践記録 第58集 大島教育事務所（令和5年）
- 大島の教育P a m p h l e t 1 大島教育事務所（令和2年）
- 学習者主体の授業の提案 鹿児島県教育委員会（令和5年）
- 学びの羅針盤 鹿児島県教育委員会（令和6年）
- 学びの場の変更に関わる「段階的な検討のプロセス」の手引～校内支援体制の更なる充実に向けて～ 鹿児島県教育委員会（令和6年）
- 小学校「個別最適な学び」と「協働的な学び」をつなぐ国語授業 東洋館出版社（令和5年）
- 流動型「学び合い」の授業づくり 小学館（令和2年）
- 『令和の日本型教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～ 文部科学省答申（令和3年）
- 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編 文部科学省（平成29年）
- 自己調整学習 主体的な学習者を育てる方法と実践 明治図書（令和5年）

はじめに

本研究主題における本校の研修は、6年計画となっている。児童が入学してから卒業するまでの、学びに関する様々な変容を分析しながら、研修を進めることが目的である。今年度は、その第2期(Ⅱ)に当たる。児童を、「ジリツした学習者」に育て、これからの社会を生き抜く力を付けるために、本校で研究してきたことを、本研究論文にまとめた。

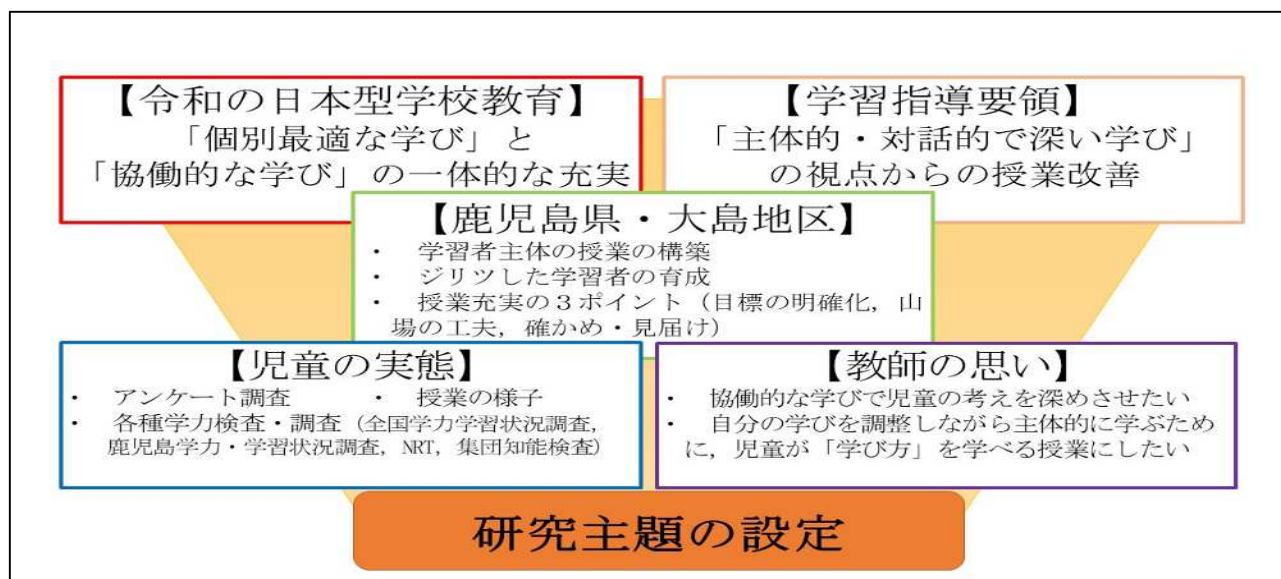


【図1 6年計画の研究のイメージ】

I 研究主題

児童の学びを広げ・深める授業デザインの構築
～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して～

II 研究主題設定の理由



【図2 研究主題設定のイメージ図】

研究主題は、令和の日本型学校教育や時代の要請、鹿児島県教育委員会や大島教育事務所が示す重点事項、児童の実態、そして教師の思いをもとに設定した。これからの予測困難な社会を生き抜いていく児童にとって、見通しや目標をもちながら、課題解決に向けて自己選択・決定していく機会や、多様な他者と協働的に学ぶ機会が、確実に確保されることが必要である。児童が様々な課題解決に向けて、自分で選択・決定した方法で考えや答えを導き出す「個別最適な学び」と、あらゆる他者との学びの中で多様な見方や考え方から自分の考えや学び方を深化させる「協働的な学び」の一体的な充実を図った授業を行えば、児童の考えに、より広がりや深まりが生まれ、児童がこれからの自分自身の生き方を構築していく力（生きる力）を身に付けていけるのではないかと考えた。

Ⅲ 研究の構想

1 研究の仮説

【研究の仮説 1】

児童が学習課題の解決に向けて、学びの見通しをもったり、学びの方法を自己選択・決定したりするための工夫をすることにより、児童自身が学びを調整しながら、主体的に学習できるようになるのではないかな。

【研究の仮説 2】

互いの考えを広げ・深める協働的な学びの工夫をすることにより、児童が自分の考えを深化させたり表現したりしながら、助け合って学び合うことができるようになるのではないかな。

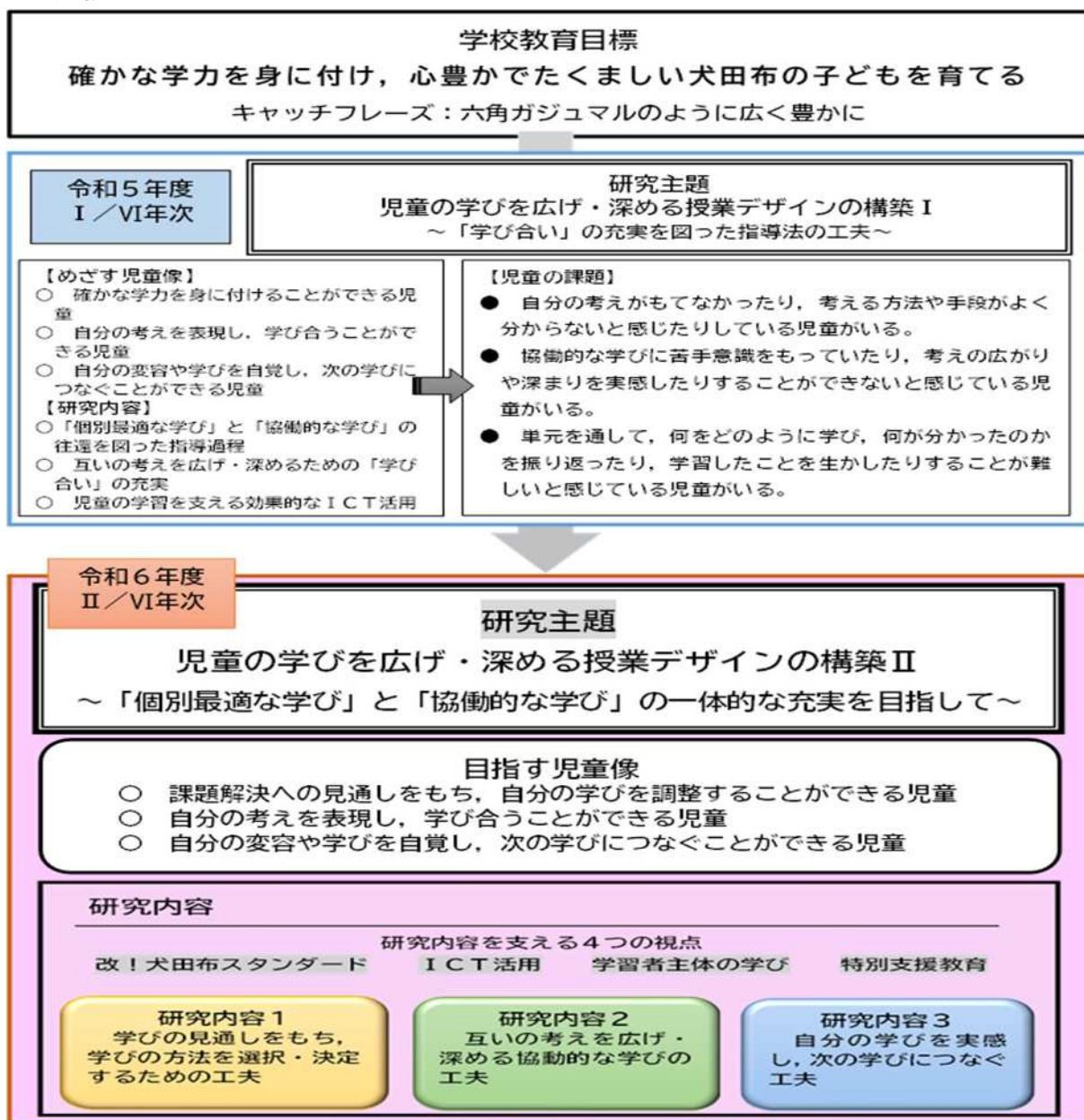
【研究の仮説 3】

児童が学びを実感したり、次の学びにつなげたりできる振り返りの工夫をすることにより、児童が自分の学びを自覚し、調整しながら次の学びにつなぐことができるようになるのではないかな。

2 研究内容

研究を支える 4 つの視点	
「改！犬田布スタンダード」「ICT活用」「学習者主体の学び」「特別支援教育」	
【研究内容 1】	学びの見通しをもち、学びの方法を選択・決定するための工夫 ○ 見通しをもって課題を解決するための学習計画表の作成 ○ 学びを選択・決定するための、学びの選択の視点の提示 ○ 学び方カードの作成と活用
【研究内容 2】	互いの考えを広げ・深める協働的な学びの工夫 ○ あらゆる他者（友だち、先生、保護者、地域人材、専門家など）との協働的な学びの場の設定 ○ 助け合い型の学び合い ○ 学び合いの視点や方法、モデルの示し方
【研究内容 3】	自分の学びを実感し、次の学びにつなぐ工夫 ○ 自分の学びを実感するための、学びの見える化 ○ 自分の学びを調整し、次の学びにつなぐ振り返りの視点や方法（振り返りの「INTB」）

3 研究構想図



IV 研究の実際

1 研究を支える4つの視点

(1) 改！犬田布スタンダード

児童が主体的に学習を進めていくためには、「授業や単元の見通し」をもたなければならない。そこで、教師が「主体的・対話的で深い学び」を実現できる指導過程を確立する必要があると考えた。具体的には、図3のとおり「つかむ・見通す」「調べる・考える」「学び合う」「学びを実感する」という指導過程で、次の学びにつなげるというサイクルで授業を進めた。



【図3 指導過程「犬小スタンダード」】

(2) ICTの有効活用

児童の学習に対する意欲や主体性を促進するため、各指導過程におけるICTの効果的で効率的な活用を、発達段階に応じて児童の活用スキルが高まるよう設定した（図4）。様々な授業や活動の場で、タブレットを文房具のように活用し、児童の情報活用能力の向上を図っている。



【図4 段階別のICT活用法】

- ★個別最適化
- ★比較・共有・説明
- ★学びの見える化



【写真1 タブレットで自分の考えをまとめる児童】

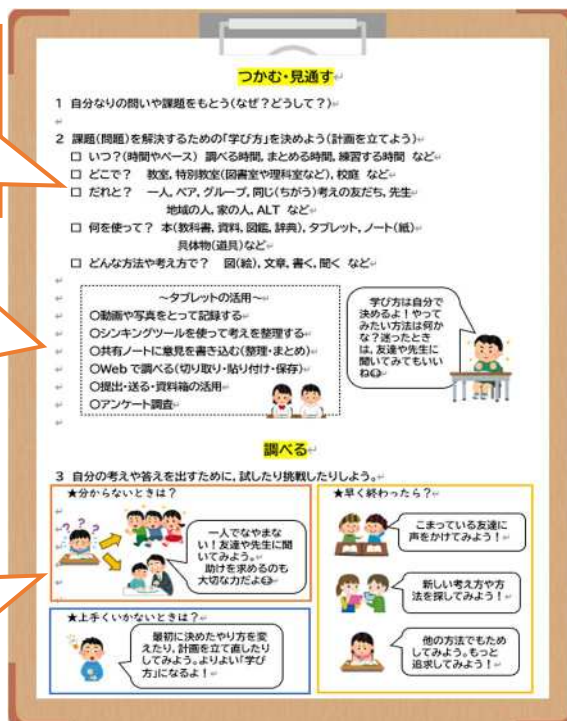
(3) 学習者主体の学び

児童が、自分の学びを調整しながら学習が進められるように、「学び方カード」を作成した。図5は、「学び方カード」の一部である。カードには、課題解決のための方法の自己選択・決定の視点、ICT活用や助け合いの学び、そして裏面には、学び合いの視点や振り返りの視点を示し、犬田布スタンダードに沿って作成した。学びの自己選択・決定の視点は、鹿児島県教育委員会の令和6年度版「学びの羅針盤」を参考にしてている。

学びを自己選択・決定するための5つの視点

調べたり、考えをまとめたりするための、タブレットの活用

助け合
いの学び
方や，学
びを促進
する方法



【図5 児童の学び方カードの一部（高学年用）】

(4) 特別支援教育

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実の実現には、一人一人の実態を把握することが必須である。児童の学習定着度や学びのスタイル、困難さを探るために、各種検査や校内独自のアンケート調査の分析を行った（写真2）（図6と7）。そして、その分析を基に、特別支援教育の視点から、個の学習適正に応じた学習活動を取り入れるなど、児童の学びを支える手立てを考えた（鹿児島県教育委員会「学びの場の変更に関わる『段階的な検討のプロセス』の手引」と資料集「新学年別知能検査の分析と活用」を参考）。



【写真2 児童の学び方の分析を行った、外部講師による研修】

A 式知能 (抽象言語型) 36%	言語的な素材を用いた学習活動が得意。 ・言語的な説明を適宜加える。 ・読書教材を加える。 ★視覚教材や図版を活用した学習場面では、じっくり取り組ませながら、教師が適宜言葉で説明する等支援が必要。	
B 式知能 (感覚運動型) 9%	図形・絵画・記号といった非言語的な素材を用いた学習活動が得意。 ・視覚教材を多用する。 ・図版を効果的に活用する。 ・機器等の操作や動きを伴った学習活動などの指導が効果的。 ★言語的な教材を用いた教材場面では、イメージ化させるなどの適切な配慮が必要。	
バランスタイプ 55%	★どちらのタイプの傾向があるか、児童の学習パターンや好み进行分析する。	

【図6 教研式知能検査：児童の学習適性】

慎重型(速い×正確) 「正確にできているから安心してスピードを上げてみよう。」	着実型(普通×正確) 「スピードを意識してやってみよう。」	効率型(速い×正確) 「課題が速く終わったら時に適宜しないように次の課題を薦めよう。」
悠長型(速い×普通) 「スピードを意識してやってみよう。」	普通型(普通×普通)	迅速型(速い×普通) 「スピードをより正確さを気にして。」
暖行型(速い×不正確) 「ゆっくりでいいから、まずは正確にやることを目標に。」	準急性型(普通×不正確) 「あわてずにゆっくりやるとミス減るよ。」	急性型(速い×不正確) 「あわてんぼうだな。ゆっくり確認しながらやろう。」

【図7 教研式知能検査：児童の課題解決スタイル】

2 研究内容1「学びの見通しをもち、学びの方法を選択・決定するための工夫」

児童が、自分の考えをもったり再構築したりしながら、学びを広げたり深めたりするためには、まず、児童自身が学習全体を見通しながら、課題を解決する方法を見出していくことが必要である。そのために、見通しをもって課題を解決するための工夫や、自分の学びを自己選択・決定できるような工夫を行った。

(1) 見通しをもって課題を解決するための工夫

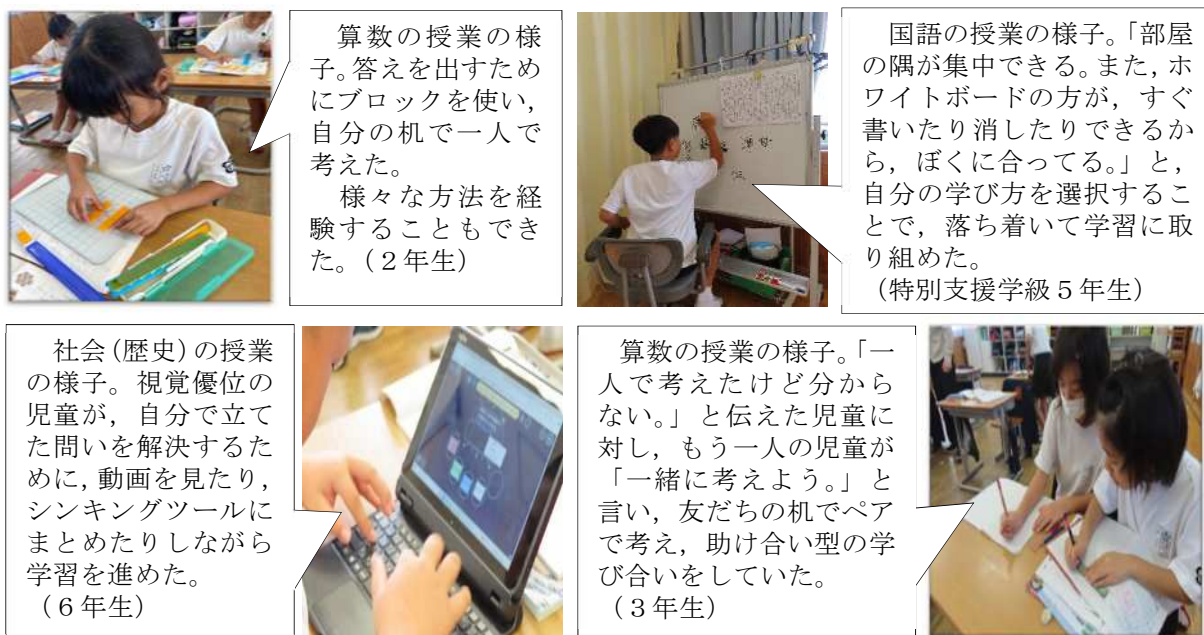
学習課題を達成するために、どのような過程(手順)で学びを進めていけばよいかを考える必要がある。低学年から学習計画を意識、経験させることで、自身の学びを調整しながら、主体的に学習できるようになるのではないかと考えた。また、学習計画表と振り返りを同じシートにすることで、自分の学びの変容を捉えながら、次の学習につなげられるようにした(図8)。

学習計画表 名前	教科書 P 56～ P 59	ふりかえり
単元のあめて 自分の目標	中心となる語や文を見つけて要約し、調べたことを書く 工芸品の美しさを最大限に伝えられるようなリーフレットを作る	INTB 最初は、読めることに無理がかりすぎてまとめる時間が足りなかった。計画表を見ながら進めようと思った。
① ・調べる工芸品を決める	・調べる内容を決める	INTB 最初は、読めることに無理がかりすぎてまとめる時間が足りなかった。計画表を見ながら進めようと思った。
② ・本場大島紬について調べる	インターネット クラゲチャート	INTB 調べた内容をまとめることができた。インターネットで調べた内容をまとめることができた。
③ ・本場大島紬について調べる	インターネット クラゲチャート	INTB インターネットの手紙を渡して先生に見せた。先生が褒めた。先生に褒められたことが嬉しかった。
④ ・リーフレットをつくり始める	ロイロノート	INTB 調べた内容をまとめることができた。インターネットで調べた内容をまとめることができた。
⑤ ・リーフレットをつくる	写真を選びなおす	INTB 調べた内容をまとめることができた。インターネットで調べた内容をまとめることができた。
⑥ ・リーフレットを見直して先生に見てもらう	内容と写真 句読点 段落	INTB 先生に褒められたことが嬉しかった。先生に褒められたことが嬉しかった。
⑦ リーフレットを発表する	交流学級で発表する	発表の動画と感想

【図8 ロイロノートで作成した学習シート】

(2) 自分の学びを自己選択・決定するための工夫

児童が自分の学びを調整しながら、主体的に学習を進めていくために、どのように課題を解決していくかを、自分自身で選択・決定することが大切である。また、それは、児童の学習への興味・関心を高めるためにも必要なことである。そこで、まず、「学びの選択の視点」を与えることが必要だと考え、鹿児島県教育委員会の「学びの羅針盤」を参考に、ICTの活用法も加えて「学び方カード」(図5)を示した。これに加え、学習の中で児童が自己選択・決定できる場や環境づくり(具体物の準備や掲示、設備)も行い、児童が課題解決に向けて、自分が選んだ方法で粘り強く取り組むことができるよう工夫した(図9)。



【図9 児童が学習の方法を自己選択・決定し学ぶ様子】

3 研究内容2「互いの考えを広げ・深める協働的な学びの工夫」

児童が自身の学びを広げたり深めたりするためには、多様な価値観や知識をもった他者と協働的に学ぶことが必要である。児童が、これからの社会を生き抜いていくために、考えを語り、もらい、創る力が不可欠だと考える。よって、犬田布小スタンダード(指導過程)にも「学び合い」を位置付けた。

(1) あらゆる他者との協働的な学びで、考えの広がりや深まりを得る工夫

あらゆる他者との協働的な学び



【地域の方へインタビュー】
学校から一番近いゴミステーションの隣にある商店へ。地域のゴミ出しやポイ捨ての現状について知ることができた。



【他学年への調査：異学年】
家庭ゴミの種類や、ゴミ出し日について、他学年の友だちにアンケートを実施。児童にとって予想外の結果が得られた。



【ゴミ処理場へ社会科見学：専門家】
徳之島クリーンセンターへ社会科見学。専門家との協働的な学びで、ゴミの処理について多くのことを学び、体験することができた。



【学級の友だちと、そして教師と】
「リサイクルされたゴミはどうなる？」という問いを解決するために、2人で役割分担し、助け合いながら学習した。

更なる広がりや深まり



【交流学級での学び合い】

まとめ
私がゴミについての勉強をして初めて知ったことは、ゴミを燃やした後、残った灰を再利用していること。私は初め、「ゴミは燃やした後はどうしているのかな。」と、疑問に思っていました。ですが、ゴミの勉強を始めてから、段々とゴミについて分かってきた時に、ゴミは燃やした後燃え残った灰を道路の材料にしていることが分かりました。
これからはあまりゴミを増やさないようにし、ゴミ拾いをしたりしたいと思います。

【自分の考え】
・出来るだけ紙皿、割り箸は捨てる(燃えるゴミ軽減)
・ご飯は自分に合った量だけつく(食品ロス防止)
・ペットボトルや缶はちゃんと分別する(再利用)
・生ゴミは肥料にする

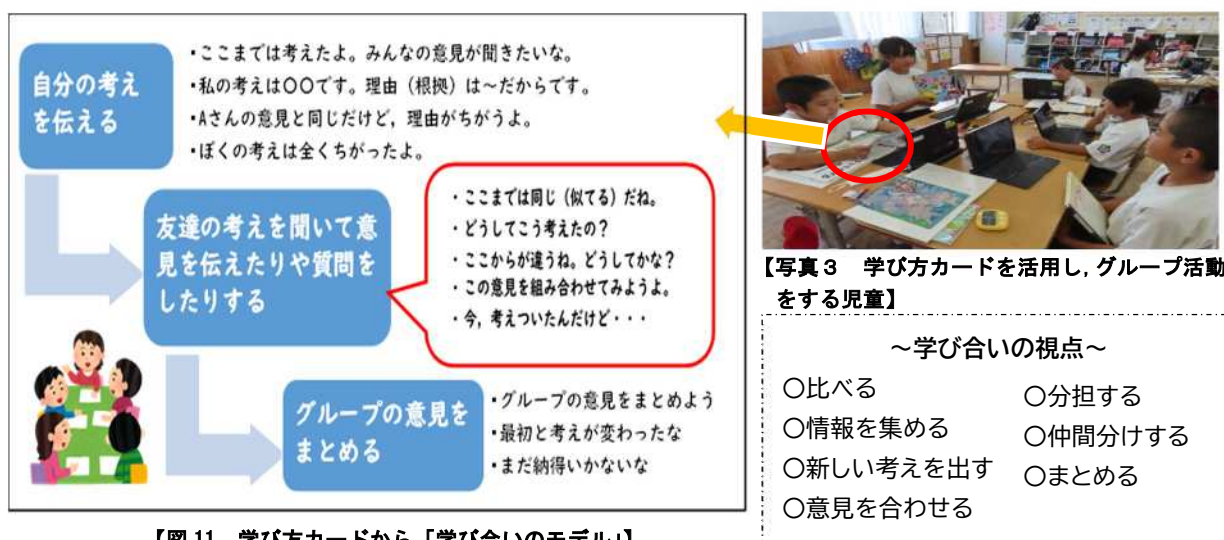
ゴミを減らすため(地球を守るため)に自分達に出来る事

【図10 4年生社会科「ごみのしやりと利用」における協働的な学び】

本校の児童は、入学前からほぼ変わらないメンバーで学んできている。そのことが、児童が学び合いに対して消極的であったり、学びの深まりが感じられなかったりする要因の一つである。そこで、学び合いの視野を広げることが必要ではないかと考えた。あらゆる他者と関わり、助け合うことで、児童の学び合いに対する興味・関心を高め、多くのことを知り、考え、共有することで、考えの広がりや深まりが得られるように工夫した(図10)。

(2) 学び合い方を示す工夫

「学び合いの仕方が分からない。」という理由で、学び合うことに難色を示す児童も少なくない。そのために、どのように話し合えば、考えを広げ、深めることができるかの「視点や方法」を示し、低学年から経験させることが大事だと考えた。その際に活用したのが、前述した「学び方カード」(図5)である。カードには、学び合いのモデル(図11)や学び合いの視点、心得を示した。必要なときにいつでも使えるよう、机の横にかけたり、ロイロノートの資料箱に入れたりしている(写真3)。



【図11 学び方カードから「学び合いのモデル」】

【写真3 学び方カードを活用し、グループ活動をする児童】

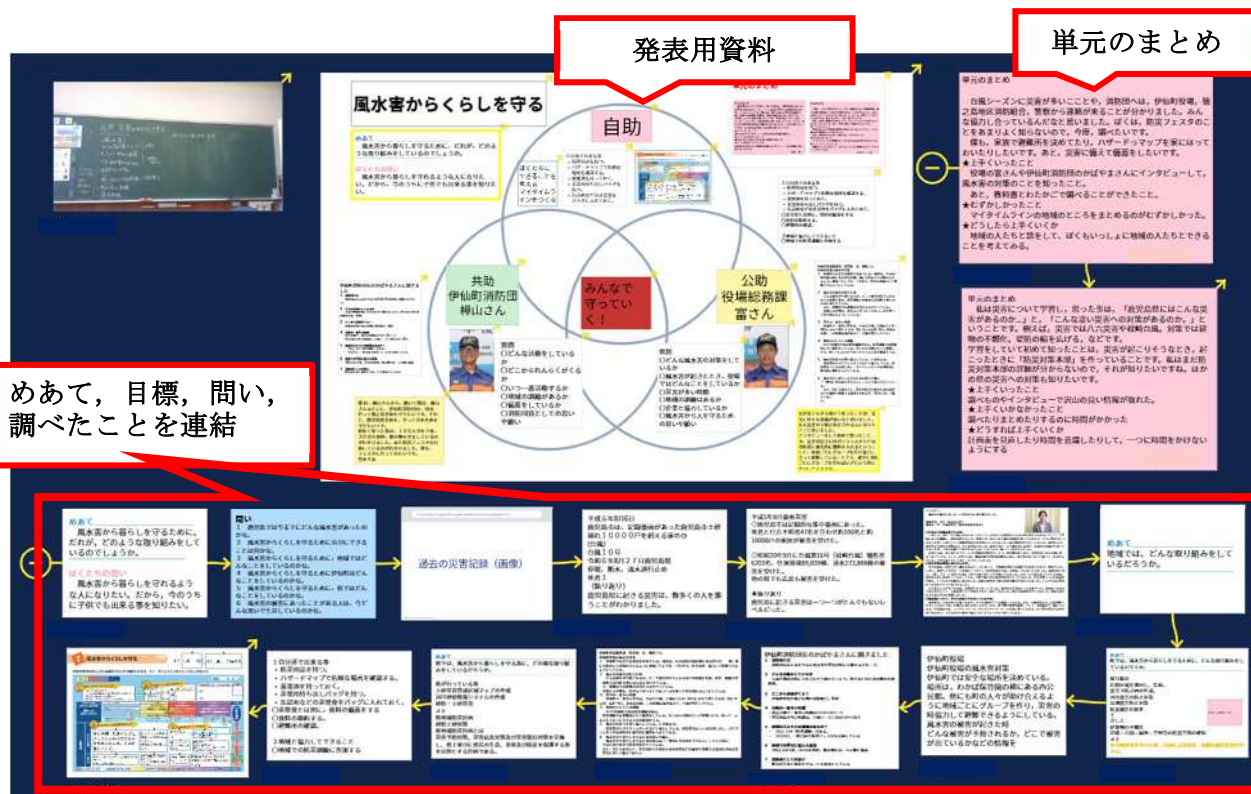
4 研究内容3「自分の学びを実感し、次の学びにつなぐ工夫」

児童が、自分の学びを実感し、次の学びにつなぐためには、自分が学習してきたことを見直したり、振り返ったりすることが必要である。そのために、自分が学習してきたことを視覚的に捉えることができる工夫や、自分の学びの調整を図ることができるような振り返りの工夫を行った。

(1) 自分の学びを実感するための工夫(学びの見える化)

自分の学びを実感するためには、1時間の授業や単元全体を通して、何を学習し、どんなことを調べ、考えたかをまとめた学びの足跡を残すことが大事だと考えた。「学びの見える化」で、自身の学びの変容を捉え、学びの調整をしたり、次の学びにつなげられたりできるようにした。低学年はノート、中学年以上はロイロノートを有効活用した。

図12は、児童が社会科で使用したロイロノートである。友だちと協力し合いながら調べたことを順番に横並びで整理し、発表用のシンキングツールや単元の振り返り、板書などを共有ノートにまとめ、単元全体の学びを振り返ることができるようにした。



【図12 児童が社会科で使ったロイロノートの様子】

(2) 自分の学びを調整し、次の学びにつなぐ振り返りの工夫

学習を振り返る視点を「INTB（いぬたぶ）」の4つに設定し、タブレットやワークシートで振り返りを行っている。視点を示すことで、より具体的に自分の学びやその変容を振り返れるようにした（図13）。また、「上手くいったこと、いかなかったこと」など、自分の学びを調整し、次の学びにつなげるための振り返りができるよう指導した（図14）。



【図13 振り返りの視点「INTB」】

「上手くいったこと」→「上手くいかなかったこと」→「どうすれば上手くいく？」の順で自身の学びを振り返ることで、自分の学びを調整したり、次の学びに生かそうとしたりしている。

★上手くいったこと
この単元を調べて上手くいったことは、[]さんへのインタビューで沢山の話が聞けたことで、自分達の知っていたことが知れて、勉強がはかどったことです。他にもGoogleで調べたら沢山の検索結果が出て、選ぶのが大変でしたけど細かい情報が知れたり、良く勉強になりました。これは自分のなかで上手くいった方です。

★上手くいかなかったこと
逆に上手くいかなかったことは、清掃工場で調べたことをまとめたり学習したこと、まとめを書くのに時間が掛かったり、発表の練習ができなかったりしたことです。

★どうすれば上手くいく？
ちゃんとまとめを書く練習を事前に行っていたり、練習の時間を確保するために計画を見直したりする。

【図14 ロイロノートを用いた児童の振り返り】

V 研究のまとめ

1 検査・調査結果から見られる児童の変容

児童の変容を把握するため、各種検査やアンケート調査の分析を行った。アンケートの内容は、「ジリツした学習者になるための7つの力（県教委）」の視点をもとに作成している。

【R 6 全国学力・学習状況調査】※全国平均との比較

※ は、R 6 年に正答率が全国平均を上回った項目

観点別	国語		算数	
	R 5 年	R 6 年	R 5 年	R 6 年
知識・技能	66.9(-2)	75(+5.2)	71.9(+4.7)	88.9(+16.1)
思考・判断・表現	76.7(+1.4)	70.3(+9)	68.4(+15.4)	62.5(+37.5)
全体	72(+4.8)	72(+4.3)	70(+7.5)	77(+13.6)

児童質問紙	当てはまる だいたい当てはまる	
	R 5 年	R 6 年
課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたか。	84.2(+5.4)	100(+15.2)
分からないことや詳しく知りたいことがあったとき、自分で学び方を考え、工夫することはできているか。		71.4(-9.3)
話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりできている。	94.8(+13)	71.4(-14.9)
学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができるか。	84.2(+6.8)	85.8(+5)

【学習に関する調査（校内：R 6 年）】

(%)

(%)

成果が見られた項目	当てはまる だいたい当てはまる		課題が見られた項目	当てはまる だいたい当てはまる	
	7 月	12 月		7 月	12 月
授業では自分なりの問いをもって学習している。	86.6	92.8	授業では課題の解決にむけて自分から意欲的に取り組んでいる。	95.0	89.8
授業では計画を立てて学習している。	87.5	96.9	自分の考えを話すことが好きだ。	69.8	73.5
「むずかしいな。」と思う問題も考えたり、周りの人に聞いたりして解決しようとしている。	84.3	90.7	授業では、立場や考えのちがいを意識して話し合い、自分とはちがう意見を生かして考えをまとめている。	95.8	83.1
自分が決めた方法で、課題や問題を解決しようとしている。	80.1	87.9	家では、自分で計画を立てて、学校で学習したことをふり返っている。	79.2	62.7

2 研究の成果と課題

	仮説 1	仮説 2	仮説 3
成 果	学習計画を立てる（立てさせる）ことで、単元全体の見通しをもち、時間や内容を自己調整しながら学習するようになってきた。また、「課題や問題の解決方法を自分で自己選択・決定する」という主体性や自主性が育ってきた。	自分の考えを出す段階から、友だちを含む他者と学び合う（助け合い型の学び）ことで、解決策を見出したり、多様な意見を聞いたりすることができ、「むずかしいな。」と思う問題も、周囲と協力し合って解決しようとする児童が増えた。	学びの見える化で、自分の考えや学びの変容を捉えながら次の学びを調整することができた。また、振り返りの視点を示すことで、具体的に自分の学びを振り返り、次の学習や家庭学習につなぐことができるようになってきた。
課 題	課題解決に向けて計画を立て、方法を自己選択・決定しながら学習する児童は増えたが、それが家庭学習につながっていない。「学び方」については、課題が多いと考える。低学年から様々な経験をさせる中で、自身の学び方を見出す工夫を考えていきたい。	考えの深まりや広がりを感じている児童は多いが、他者と学び合うことに難色を示している児童も多い（高学年）。自分と違う考えを聞いたり、自分の考えを話したりすることを楽しめていない児童もいる。その原因を追究・分析し、解決策を考えていきたい。	「分かった・できた」の視点で振り返る児童は多い。今後は、分からなかったことに対しても「どうしたら上手くいくか」を具体的に振り返るなど、自身の学びを調整するための、発達段階に応じた振り返りや価値付けの工夫をしていきたい。

おわりに

写真 4 は、特別支援学級の児童が友だちを教室に招き、「大島紬の魅力」を発表している様子である。「調べたことはタブレットでも見られるけど、直接伝えた方がお互い勉強になるよ。」という児童の発言がきっかけだった。学びの広がりや深まりを児童自身が感じている。児童が、今後の生き方につながる学びを見出し、一人一人が達成感や幸福感を得られる授業づくりのため、今後更に本研究を発展させていきたい。



【写真 4 発表する児童の様子】